



第3回講演要旨

「中世鎌倉の信仰と仏像」

講師：神奈川県立金沢文庫 濑谷貴之さん

とき：平成20年6月21日 ところ：鎌倉商工会議所301会議室

平成18年に金沢文庫で、「靈験仏－鎌倉人の信仰世界－」という展覧会を開催した。このとき鎌倉の仏教文化を改めて考え直していくかなくてはならないと気付いた。「靈験仏」は、日本の彫刻史にとって重要なテーマであるとともに、鎌倉の仏教文化にとっても重要なものであり、キーワードになる。

◎鎌倉における初期の靈験仏信仰

靈験仏信仰と鎌倉を考える上で重要なものとして、13世紀中頃に作られた鎌倉の外港、六浦庄太寧寺の本尊薬師如来立像と旧蔵十二神将像（現奈良国立博物館所蔵）がある。

薬師如来立像は大変特徴的な体と顔をした仏像で、渦を巻いている特徴的な頭は京都・嵐山の清涼寺（釈迦堂）の釈迦如来像の型である。この釈迦如来像は平安中期に東大寺の齋然（ちょうねん）という僧が、中国にあった原像を真似て作らせて日本に請來した珍しい釈迦如来像で、内臓などもあり、「三国伝来の釈迦如来像」として有名である。渦巻状の頭と袈裟を肩までかけた特徴的な姿で、日本では「清涼寺式」という。

一方、体の特徴は善光寺の阿弥陀如来像を真似て袈裟で両肩をおり、これを「通肩」という。衣文を省略して金剛佛風の硬い表現にしているところも、善光寺の阿弥陀如来の体の形式をとっている。

善光寺は源頼朝が肩入れしており、鎌倉時代大変信仰を集めた。そこで鎌倉に新善光寺が建てられた。新清涼寺もあり、三国伝来の清涼寺式の釈迦如来像があった。また、鎌倉の長谷寺は中世の資料では、新長谷寺と呼ばれていた。つまり、鎌倉時代初期の鎌倉には新清涼寺、新善光寺、新長谷寺、新清水寺もあった。新清水寺にあった鉄仏の仏頭は、明治維新以降、東京の大観音寺に安置されている。

太寧寺の仏像は木彫像で等身大、頭は清涼寺式の釈迦、体は善光寺式の阿弥陀、前に手を上げるのは薬師如来の特徴だから、最初から薬師如来として作られている。1回拝めば、釈迦如来・阿弥陀如来・薬師如来の3尊を拝んだことになり、また、過去・現在・未来の三世仏を一度で拝むという巧妙な考えのものと作られている。

初期の鎌倉の寺院造営を考える上で見落としがち

だが、靈験仏信仰を移入して寺院を展開したと考えられ、複合的な太寧寺の薬師如来像は鎌倉の靈験仏信仰の最初のピークと言える。

◎鎌倉独自の靈験仏信仰、キーワードは「運慶」

太寧寺の薬師如来像には十二神将が付属している。今は奈良国立博物館が所蔵している。このうち戌神像は衣を左手でつかみ、頭は巻き毛の特徴的な姿である。旧太寧寺像は12体揃っていて、十二神将像のひとつとして関東地方には類例がいくつか見受けられる。

この十二神将像には原像がある。覚園寺の十二神将像は、北条義時が建てた大倉薬師堂に元々あったものを真似て室町時代に作られたものだが、大倉薬師堂にあった十二神将像は鎌倉初期に運慶により作られたものであった。この運慶作の像は焼けてしまったが、靈験があると有名だった。

十二所の光触寺の類焼阿弥陀縁起の成立や、大倉薬師堂の十二神将の伝説は、運慶の造る仏像に、生身仏信仰が付随しているのを表している。

東国で運慶作の現存作品として有名なのは、伊豆韭山の願成就院の阿弥陀如来坐像と脇侍であり、そして淨樂寺の阿弥陀三尊と不動・毘沙門天像である。さらに佐原義連の発願による横須賀の満願寺の地蔵菩薩立像と觀音菩薩立像も、運慶工房の作品として考えてもよい。

もうひとつ重要なのが、称名寺光明院から発見され、金沢文庫でお預かりしている大威德明王の坐像。1216年（建保4）、運慶最晩年の作品である。鎌倉幕府の中核でつくられた唯一の運慶作品だ。

また、現存しないものの記録に残るものには、覚園寺の前身の大倉薬師堂本尊の薬師如来像と、勝長寿院の五仏堂に安置した五大明王があり、後者は北条政子の依頼により作られた。

運慶と鎌倉幕府の関係を見ると、前半は御家人層の需用に応え、12世紀に入ると幕府の中核の限られた人のために造ったようである。東大寺の完成によって運慶の地位が上がったのだろう。運慶自身が造った仏像が靈験仏として信仰され、運慶と生身仏信仰が結びついて、鎌倉独自の靈験仏信仰が展開する。

なお、今後鎌倉の靈験仏信仰としては、地蔵信仰について注目している。